

派遣者番号	R4K24	氏名	毛利 昌隆
研究主題 —副主題—	動感に視点をあてた体育授業における「協働的な学び」に関する事例研究 —児童の対話に焦点をあてて—		
派遣先大学	東京学芸大学 教職大学院	指導担当者	鈴木 聡
所属	大田区立東糀谷小学校	所属長	菊原 寛之

キーワード：課題意識・動感の共有 対象化 観察 潜勢自己運動 運動表象
運動課題 動感の共感

要旨：本研究は、「協働的な学び」を「運動技術の探究及び動きの感覚（動感）の獲得に向け、当事者意識をもつ者同士が動感を媒介にして関わり合う中で生まれる学び」と捉え、動感に視点をあてた体育授業を仕組み、児童同士の対話に着目しながらどのような「協働的な学び」を展開しているのかについて、その内実を考察することを目的とした。

小学校第4学年マット運動单元における「女子8班」の第4時の学びの過程について、逐語記録、個人カードの記述、動感の伝え合いに関する質問紙調査のデータをもとに解釈・考察した。

調査結果を考察したところ、(1)「動感を媒介にした関わり合い」のモデル化 (2)「困り感・課題意識の共有」「動感の表出・共有」が起点となる可能性 (3)運動課題の本質に迫ることで、「動感を媒介にした関わり合い」が活性化する可能性 (4)「動感を媒介にした関わり合い」を重ねることで、仲間の動感に共感できるようになり、助言が相手の学びに作用するようになる可能性 の4点の知見が得られた。

動感に視点をあてた体育授業における「協働的な学び」に関する事例研究

—児童の対話に焦点をあてて—

毛利 昌隆

1. 研究の目的

「協働的な学び」が推奨される一方、言語活動の形骸化が問題視されている。思考しコミュニケーションする活動が自ずと生じる課題設定や場づくりが、授業づくりにおいて求められる。

体育科の学習内容として、動きの感覚的内容が重要視されている。スポーツの認知的内容、技術的内容、動きの感覚的内容を体育科の学習内容と位置付けたときに、「協働的な学び」を「運動技術の探究及び動きの感覚（動感）の獲得に向け、当事者意識をもつ者同士が動感を媒介にして関わり合う中で生まれる学び」と捉えることができるだろう。本研究は、動感に視点をあてた体育授業を仕組み、児童同士の対話に着目しながらどのような「協働的な学び」を展開しているのかについて、その内実を考察することを目的とした。

2. 研究の方法

小学校第4学年マット運動単元「クルン？ ギュッ？ 動感を伝え合い、技のコツを見つけ出そう！！」全10時間の授業を対象とした。授業者は、筆者であった。マット運動における技能の高い児童と低い児童が混在している「女子8班」を抽出班として選定した。

本単元では、動感とは「動いて感じたこと」と定義され、体の部位に力がかかる感覚、力のかかり方・抜け方に加え、心地よさ等の快感や痛みなどの不快感も含めていた。動感が表出されやすいよう、困り感を言語化したりオノマトペで表現したりする例を出し、動感の言語化を促す工夫がされていた。授業の展開及び学習過程は表1の通りである。

表1 マット運動単元学習過程（全10時間）

第1時	第2時	第3時	第4時	第5時	第6時	第7時	第8時	第9時	第10時
学習内容の確認・場の準備・準備運動・感覚づくりの運動									
オリエンテーション	前転 開い見付け	前転・前転・ V字バランス 開い見付け	前転・前転・ V字バランス 開い見付け 後転 開い見付け	後倒立 開い見付け	補助倒立 コツ探究	側方倒立回転 コツ探究	側方倒立回転 コツ探究 (手型・足型あり)	側方倒立回転 コツ探究 (ゴム紐あり)	側方倒立回転 コツ探究 (ゴム紐あり)
前転	開いの共有・探究課題設定			川跳び コツ探究	見付けたコツの共有		側方倒立回転 コツ探究 (手型・足型あり)	シンクロマット 練習	シンクロマット 発表会・撮影会
いろいろな前転	前転 コツ探究	前転・前転・ V字バランス コツ探究	後転 コツ探究	後倒立 コツ探究	側方倒立回転 開い見付け	側方倒立回転 コツ探究 (手型・足型あり)	シンクロマット 練習		
整理運動・場の片付け・振り返り・まとめ									

収集した映像及び音声データを基に、逐語記録を作成し、動感がどのように媒介しているのかという視点で、抽出班における対話の過程について解釈を行った。解釈には、逐語記録に加え、個人カードの記述、動感の伝え合いに関する質問紙調査のデータを基に行った。

3. 結果と考察

考察の対象を、「動感を媒介にした関わり合い」が豊かに行われていた、女子8班の第4時の「前転・前転・V字バランス(図1)」及び「後転」の学習場面とした。A、B、C、Dは抽出班の児童を表すものである。

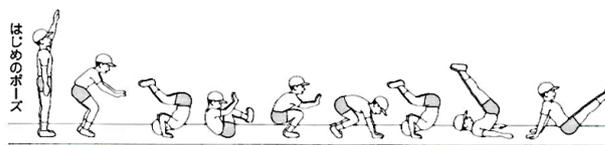


図1 「前転・前転・V字バランス」

(1) 「動感を媒介にした関わり合い」の内実

①困り感・課題意識の共有、②動感の表出・共有、③他者の観察及び潜勢自己運動（他者の動きを観察しつつ、同時に自分でも仮想したイメージの中で自分の動きとして実施してみる）、④運動表象（実際に運動をやろうとするときに、あらかじめそれを可能なものとして心的に経験する）の形成、⑤④の交流を通じたコツの編み出し、⑥再現・試技、が内実であった。⑤⑥については場面によって順番が異なっていた。

「前転・前転・V字バランス」のグループ学習においてBとDは、「目標化（自己の目標の姿と捉えること）」したAを「協働観察(図2)」しており、「後転」のグループ学習においてBは、「目標化」したAと「実態化（自己の実態に置き換えること）」したCを「比較観察(図3)」していたことが、③他者の観察及び潜勢自己運動として解釈された。共通点は、目標や自己の実態に「対象化」していたことであった。Aによる一方的な助言・演示は、B、C、Dの学びに直接的に作用したわけではなかったが、Bによって「目標化」されることによってB、C、Dの学びに作用するようになったと考えられる。

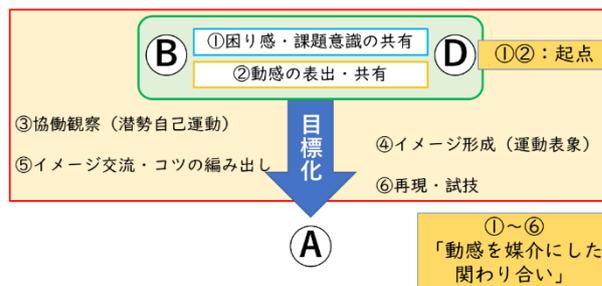


図2 モデルI：「目標」の協働観察

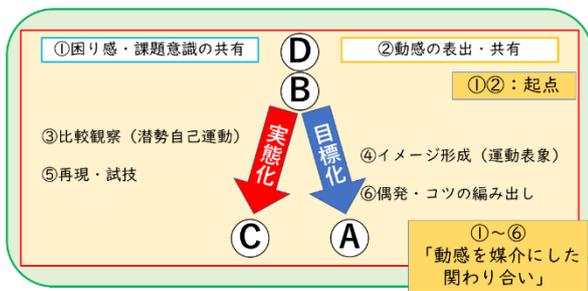


図3 モデルⅡ：「目標」と「実態」の比較観察

(2) 「動感を媒介にした関わり合い」の起点

「動感を媒介にした関わり合い」が発生したきっかけは、「前転・前転・V字バランス」のグループ学習においては、目標運動に対する悩みを共有し課題意識がBとDの間で一致したこと、互いの動感を表出し共有したことから推察される。「後転」のグループ学習においては、問いを見付ける場面を経て、共有タイムにおいてCが、自らの動感を表出しながら後転での悩みを話したことによって「課題意識の共有」「動感の共有」がなされたことがきっかけであったと推察される。

したがって、「①困り感・課題意識の共有」「②動感の表出・共有」によって、相手のことを自分事として考えようとする「当事者意識」が生まれ、「動感を媒介にした関わり合い」が発生したと考えられる。

(3) 「動感を媒介にした関わり合い」の活性化

「後転」のグループ学習では、「①困り感・課題意識の共有」「②動感の表出・共有」に加え、「共有タイム」において課題意識が「着手」から「勢い」に方向付けられたことによって、豊かな「動感を媒介にした関わり合い」が発生したと推察される。つまり、運動課題の本質に迫ったことで活性化されたと考えられる。

(4) 抽出児童Aの変容

Aの「動感の伝え合いに関する質問紙調査」から、動感の伝え合いを通して「分かち合える」ようになることに関する記述が確認され、第4時において、Aの助言がB、C、Dに直接伝わらない経験や、Bを基点とした「動感を媒介にした関わり合い」による学びの手応えが、その後の学習において、動感を媒介にした「共感」を生んだと推察される。さらに、B、C、Dの学習感想文からは、単元が進むにつれ、Aの共感的な言葉が増え、Aの助言が仲間の学びに作用するようになったことが確認された。

したがって、「動感を媒介にした関わり合い」を重ねることで、仲間の動感に共感できるようになり、助言が仲間の学びに作用するようになったと考えられる。

4. まとめと今後の課題

本研究で得られた知見は、以下の通りである。

- (1) 「動感を媒介にした関わり合い」のモデル化
- (2) 「困り感・課題意識の共有」「動感の表出・共有」が起点となる可能性
- (3) 運動課題の本質に迫ることで、「動感を媒介にした関わり合い」が活性化する可能性
- (4) 「動感を媒介にした関わり合い」を重ねることで、仲間の動感に共感できるようになり、助言が相手の学びに作用するようになる可能性

本研究で得られた知見は、体育科における「協働的な学び」の在り方に一定の示唆を与えるものであると考える。また、児童生徒が学ぶ意味をもてる課題と場について工夫する際の一助となり、言語活動が形骸化された授業の改善に寄与する可能性がある。さらに、同一の運動課題で学ぶ授業スタイルにおける、「協働的な学び」と「個別最適な学び」が往還している学びのモデルを提示することができるのではないだろうか。これらの成果は、「主体的・対話的で深い学び」の実現に貢献し、子供たちの資質・能力の育成につながることを期待できるだろう。加えて、「動きの感覚的内容」を学習内容とした「動感」に視点をあてた体育授業づくり、並びに、学校教育での発生論的運動学の活用にも寄与すると考えられる。

本研究で明らかにされた、他者の動感と自分の動感を共鳴させ同期させながら課題を解決していく学びは、これからの未来を創り出していくのではないだろうか。そしてこのような学習者の姿勢は、教師も見習うべき姿なのではないだろうか。

本単元を通じた資質・能力の変容分析、その変容や学習成果の要因について分析することや、異なる学年や領域、学習スタイルにおける「協働的な学び」について検討していくことを今後の研究課題としたい。

6. 主な参考文献

- ・岩田靖 (2005) : スポーツ教育, いま何が問題で, 何をどうすべきか. 体育科教育, 53(1), pp. 26-29.
- ・金子明友・吉田茂・三木四郎 (1996) 教師のための運動学 運動指導の実践理論, 大修館書店
- ・岡出美則 (1993) 学習集団形成過程の事例的研究. スポーツ教育学研究, 13 (1) , pp. 1-13.
- ・鈴木聡 (2021) 体育授業研究会第5回 Webinar 提案資料
- ・高橋健夫・藤井喜一・松本格之祐・大貫耕一 (2008) 新しいマット運動の授業づくり, 大修館書店